

街路性が開く建築の構え

ambulatory architecture

建築の街路性

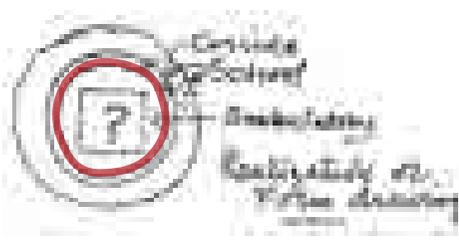
「街路」は様々な活動を受け入れる場所である。ただ歩くだけでなく、座ったり、運動をしたりなど、活動が溢れ出す「街路」には、人々を優しく受け入れる「許容力」や「包容力」があるように思う。

そして、ルイス・カーンは、この「移動空間の包容力」を「アンビュラトリー」と記し、隣接する「コリドー」とはあえて区別した。

「個人の自由な行動を許容しながら、共にそこに居られる空間」。これが、私のテーマである。



道に机を出してカフェする女性

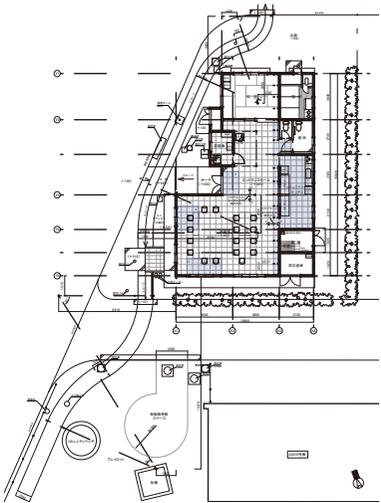


アンビュラトリーという空間

街路性の設計の実践

団地の外部空間に、地域で共有できる遊歩道を整備し、その先にある集会所をリノベーションする実施設計を、私は2023年から設計を担当した。

この遊歩道では初めからトップダウン式に道をデザインするのではなく、「フォリー」と呼ぶ、環境を読み替える小さな仕掛けをデザインして、それらをつなぐように伸びる、ある種「場当たりに延伸する道」の設計を行った。



街路性が開く集会所

場当たりに伸びる「タクティカルな道」は、そのデザインの過程に住民を巻き込んでいく。多くの住民の方と直接話し、その表情を見ながら、設計を進めていった。そんな新たな集会所は遊歩道を直接引き込み、道と一体の空間として再整備した。その際、利用のバリアである靴を履き替える動作が取り除かれ、気軽に目的のない人でも入ることの出来る場となる。

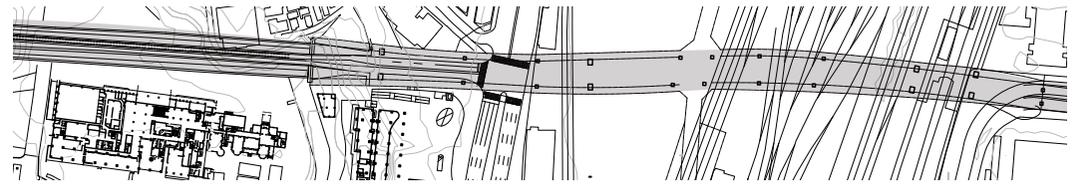
集会所内では、壁一面に配置されたディスプレイウォールという仕切り壁は、開口が重なることで奥の出来事が重なる。そしてキッチンのプレースでは既存壁を取り除き、プレースだけ見せることで、キッチンが細い境界を持つ一つの空間として存在する。

このように街路性を持ち込むことで、集会所の包容力や許容力の促進と実践と位置づけている。



都市にできる道

敷地は品川駅西口の近くにある高輪3丁目である。品川駅から敷地において、近年大規模な都市開発が行われている。現在でも多くの建物が建て替えられ、都市自体が数年単位でガラリと姿を変えていく。その中の一つのプロジェクで8年後を目安に「環状4号線」が通る計画がされている。この環状4号線は延長約28.8kmの都市計画道路であり、交通を分散化するなど重要な役割となる。環状4号線とは、傾斜地に計画されたそれは既存の都市を横断する道となり、都市の環境を一部変えてしまう。



ウォーカブルな場

私が設計するのは、環状4号線と高輪3丁目の都市開発事業で分断される高輪の歴史的地区と駅を繋げる回遊路である。環状4号線がある状態でまず道を通し、そこから建築を沿わせながら建てていった。そんな新たにできる4号線と周辺の環境に応じつつ、高低差や高架などを利用したウォーカブルな道とそれを繋ぐアンビュラトリーな建築となる。



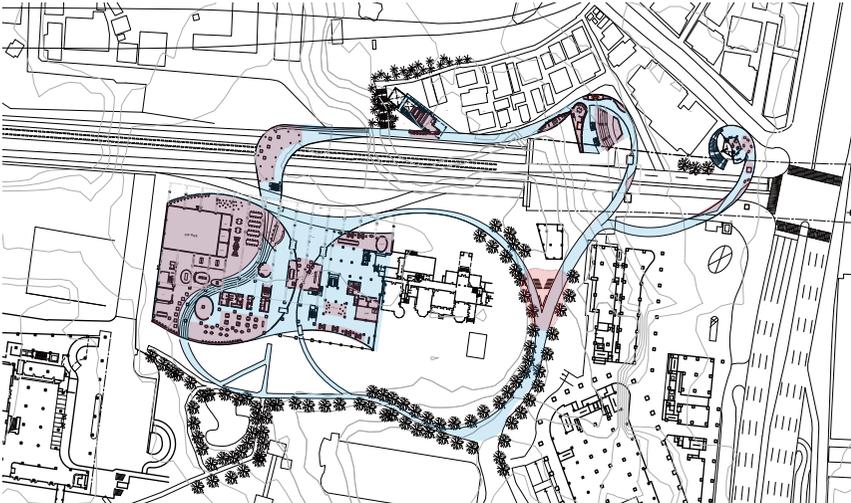
- ①都市に対して横断する環状4号線
環状4号線はホテル前や既存建築・道を横切るように通っていく。
途中から高架へと変化し、環状4号線と道路との高低差が生まれていくような環境へもなっていく。歴史的な建築や重要な道路以外は環状4号線によりなくなってしまうより削られていき、またまっすぐな環状4号線から、都市が横断してしまうような道路へと変えてしまう。
- ②環状4号線をまたがる回遊路
それに対しまたがる回遊路を通していく。
そんな回遊路は高さや道幅などを変化させながら都市を巻くように設計した。そんな道はただ道として使うのではなく、建物の中へと入り込んだり、道路を巻き込んだりなどすることにより、用途としても変化していく。
歩いていて常に景色が変化していくような道になり、この場がウォーカブルな場へと変えていく。
- ③建築を付随させる
ウォーカブルな回遊路に対し、建築を付随させていく。
道にかぶせたり、道に対して斜めに配置したり、道に沿わせたりなど、様々な配置により、道と建築をどのように使っていくかを変化させた。
そんな建築は元々建物があった場所だけでなく、4号線が通ることでもなくなってしまう建物だったりを再び設計し、都市に新たなカタチで参加をしている。

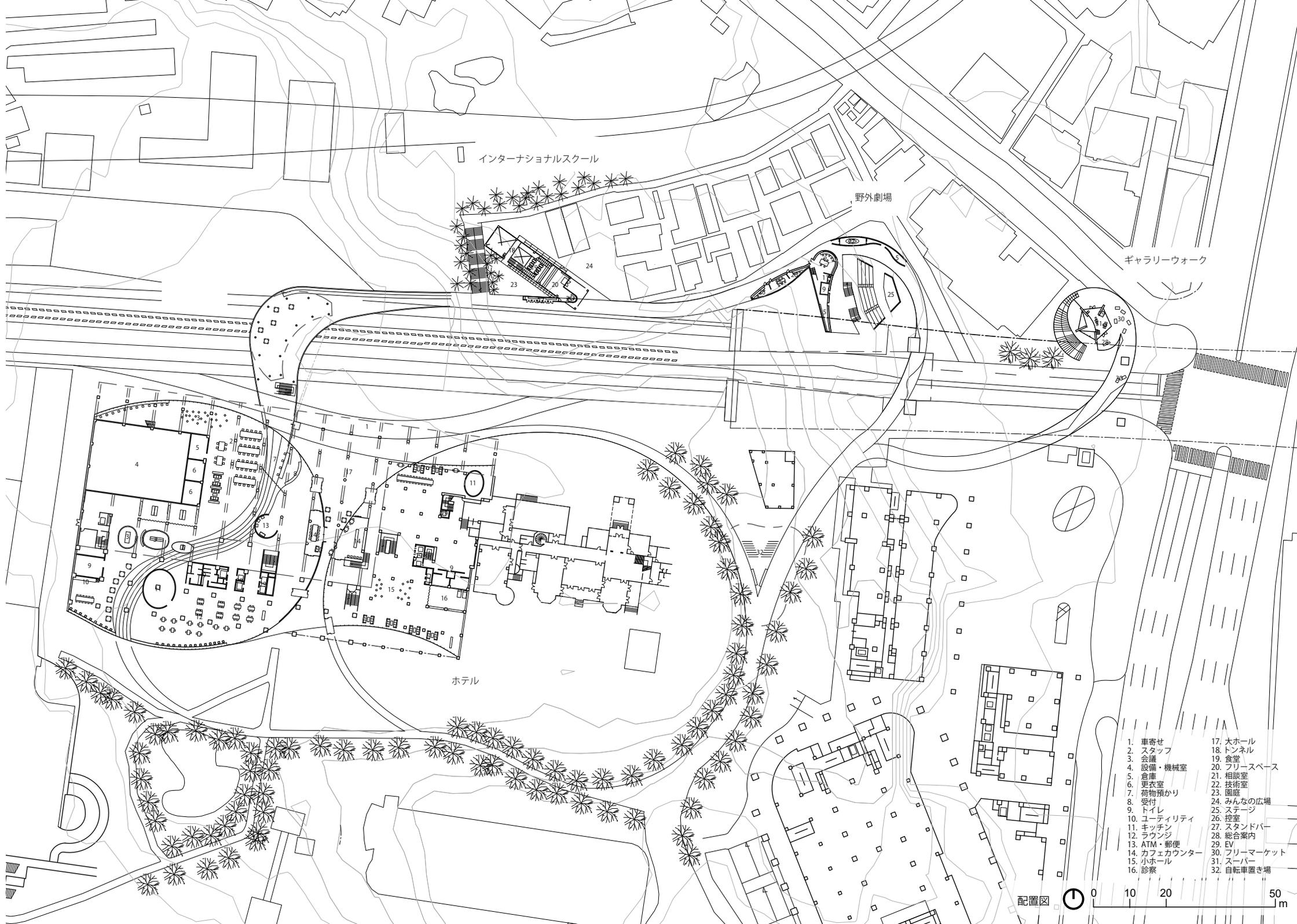
ambulatory な建築

道を通し建築を設計する際に、アンビュラトリーな場にしていく。回遊路に街路性を持たせるのではなく、建築自体に街路性を持たせることで、道だけでなく、建築に活動が溢れ、それが道へと広がっていく。
実際に設計した建築に街路性がどれほどあるのかを図にした。

- : 特定機能
- : 歩行空間
- : 街路性の場

廊下やホールなどといった歩行空間に特定機能が溢れ出している場を街路性の場と言うと、このようにどれだけなが溢れ出しているのかを可視化することができる。視線の先に配置したり、別の道や場を利用したモノを置いたり、また初めの回遊路を別の視点で捉えたりすることにより、まるで道が繋がっているようにつ、活動も視線が通るような建築へと変えていった。





インターナショナルスクール

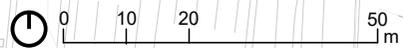
野外劇場

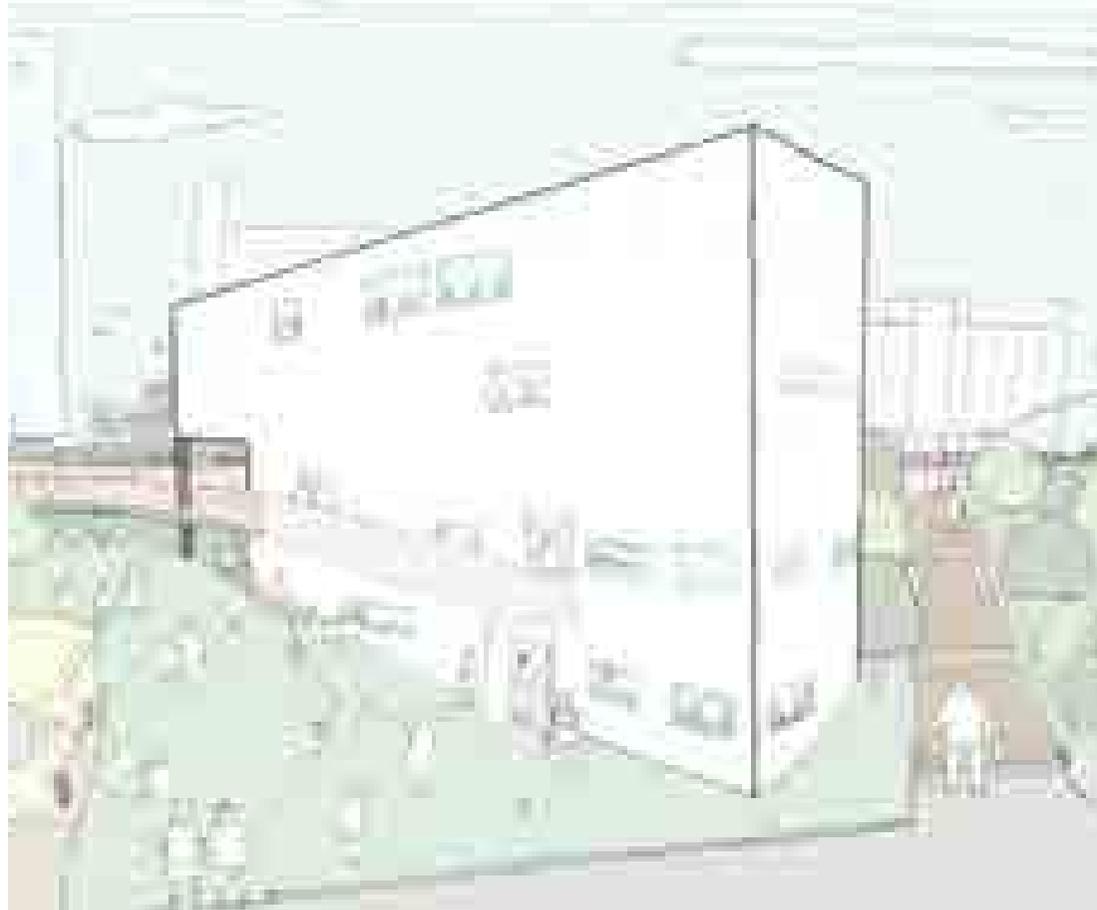
ギャラリーウォーク

ホテル

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 車寄せ | 17. 大ホール |
| 2. スタッフ | 18. トンネル |
| 3. 会議・機械室 | 19. 食堂 |
| 4. 設備・機械室 | 20. フリースペース |
| 5. 倉庫 | 21. 相談室 |
| 6. 更衣室 | 22. 技術室 |
| 7. 荷物預かり | 23. 園庭 |
| 8. 受付 | 24. みんなの広場 |
| 9. トイレ | 25. ステージ |
| 10. ユーティリティ | 26. 控室 |
| 11. キッチン | 27. スタンドバー |
| 12. ラウンジ | 28. 総合案内 |
| 13. ATM・郵便 | 29. EV |
| 14. カフェカウンター | 30. フリーマーケット |
| 15. 小ホール | 31. スーパー |
| 16. 診察 | 32. 自転車置き場 |

配置図

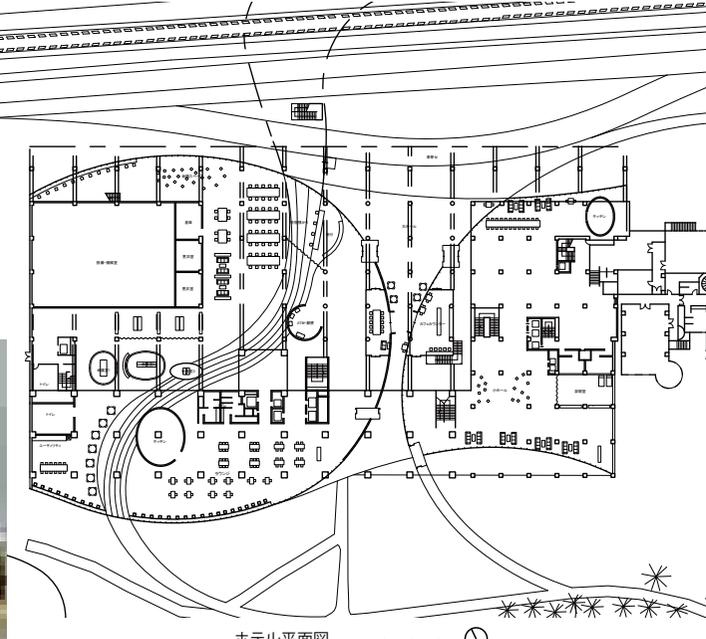
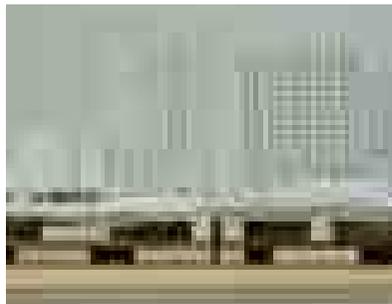




ホテル

4号線の目の前にあり、となりの旧竹田宮洋館につながるランドプリンスホテル高輪の1階ロビーでは、オフィスや待合、レストランといった機能をロビーに溢れ出させている。オフィス部分では段差やメッシュ壁などといった緩いセキュリティ、レストランは家具などでゲストとスタッフ、ゲストと一般客との空間が視覚的連続性を持つ。またホテル内に一部通り抜けの外部をつくることにより、ガレリアと呼ばれる道路が設けられ、奥の日本庭園の桜並木と繋がっていく。

雲形ヴォールトとなっている屋根はワンルームを適度に文節し、空間に特徴を与える。既存の柱や2階以上の平面・機能は変えず、一階空間だけのリノベーションであるが、開放的な場と活動の流れがよく見える道からなるホテルであり、道を歩いてきた人もアーチをした屋根で大きく受け入れる構えとなる。

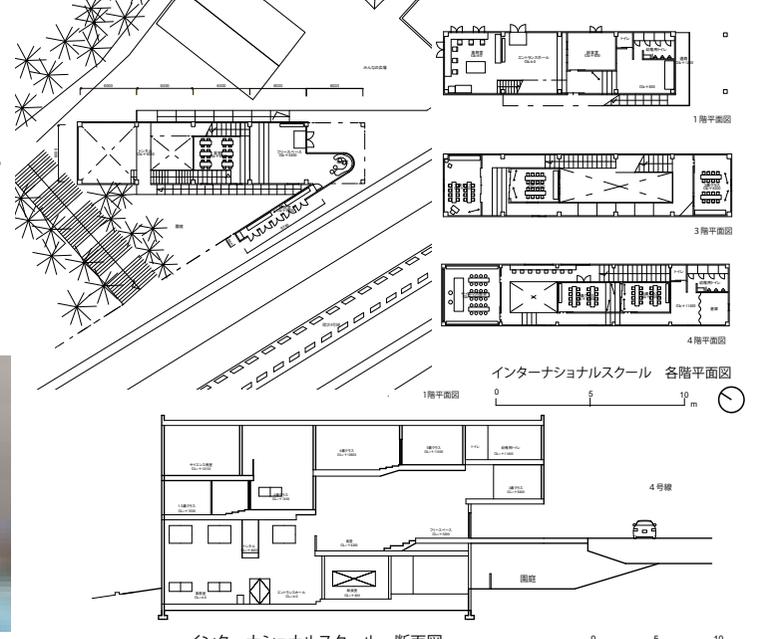


インターナショナルスクール

元々あったインターナショナルスクールが4号線のため壊れてしまったため、同じ機能で残地に新しく建て替える。

6m スパンを持った列柱の中に機能を入れ、廊下がクラスを通りながら進んでいく学校とした。一般と機能が絡まった建築である。その先は参道や公園へと繋がっているため、ショートカット導線ともなっている。

一部建物の壁が道へ伸び、そこに場を与えることで公開授業などの際は、道に対して大きく開口を開けながら行うこともできる。スクール内部は段差や可動式家具や建具により二つの部屋を繋げて一つのホールにすることで授業の幅を広げる。授業の様子や子供たちの活動をセキュリティが分かれながらも見ることが出来る建築である。実際に4号の土地権利者はこのように新しい街に参加していく





野外劇場

さらに抜けると野外劇場が現れる。ここでは地形に沿い、高架の下にある劇場のため音が反響し、それが品川周辺に溢れ出す。都市の環境音が空間に臨場感を与える。

また道を歩いていると出てくる事務などといったスタッフ機能の壁により、まっすぐであった道が蛇行する。そんな建築内部でもとまった場に機能を設けることで、一つの廊下空間を通した空間となっている。

奥行を感じる道と音という共感できる場となる野外劇場である。



野外劇場 平面図 0 5 10 m

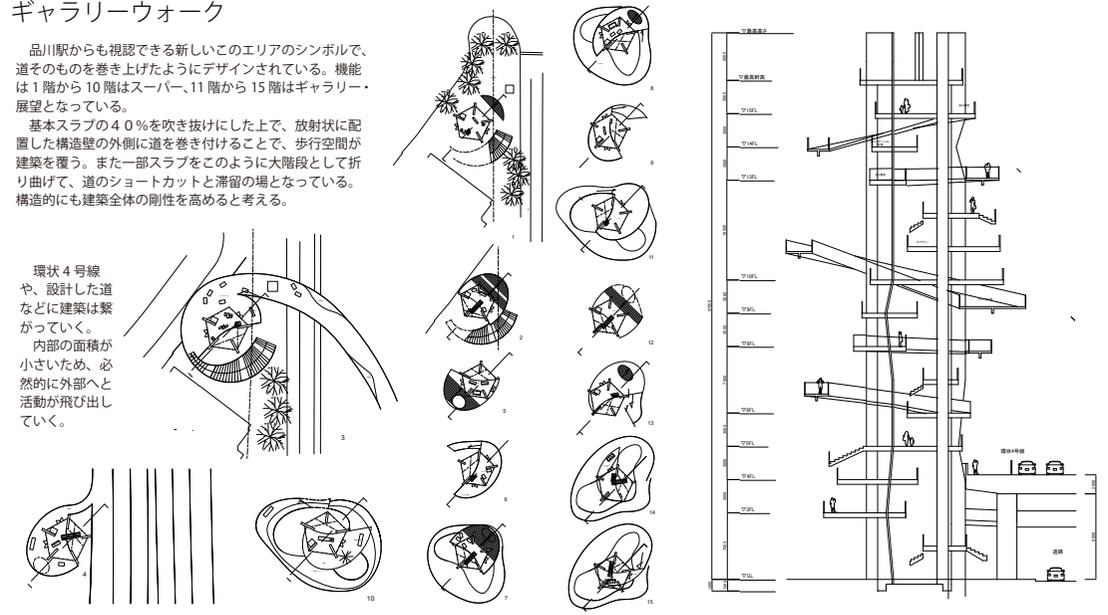
ギャラリーウォーク

品川駅からも視認できる新しいこのエリアのシンボルで、道そのものを巻き上げたようにデザインされている。機能は1階から10階はスーパー、11階から15階はギャラリー・展望となっている。

基本スラブの40%を吹き抜けにした上で、放射状に配置した構造壁の外側に道を巻き付けることで、歩行空間が建築を覆う。また一部スラブをこのように大階段として折り曲げて、道のショートカットと滞留の場となっている。構造的にも建築全体の剛性を高めると考える。

環状4号線や、設計した道などに建築は繋がっていく。

内部の面積が小さいため、必然的に外部へと活動が飛び出していく。



ギャラリーウォーク 主要各階平面図 0 5 10 m

ギャラリーウォーク 各階平面図 0 10 20 m

ギャラリーウォーク 断面図